

四
条

illustration
にら玉井



ギルドメノビー
sample version
狂育日記
R-18
Diary of the Berserk



二. 退屈な日々にお別れを

「今日は本当にありがとうございました。こんなにおいしい臨時は初めてでした」

スミレ色のおかつば頭を深々と下げ、ジブシーのユッカがお辞儀をした。うつむくと、金の輪で腕に留められた赤い薄絹の袖がふわりと垂れ下がり、踊り子の身体とは思えない慎ましやかな小ぶりの胸がわずかな谷間を覗かせる。

「いえいえ、こちらこそ」

銀髪をポニーテールにした赤い目のパラディン、ルイーゼと黒髪の男ハイブリーストは笑って応えた。

「えっと、で、ここはどこなんでしょう?」

ユッカが周りを見回す。灰色の石畳に、堅牢な建物。雲が強風に煽られて横を流れていく。

臨時を終えて首都に帰る振りをして、ハイブリーストはわざと違う場所の移動魔法を出した。行先はギルドの砦だ。

「ああ、ここはニダヴェリール。ジュノーの砦」

「砦? ああ、ここが、新しくできたっていう……」

「今週、ウチのギルドがここを獲ったから」

「えっ!? おめでとうございます」

ユッカは目の前の建物を見上げている。その胸元にはエンブレムはなく、ギルドに入っていないことが分かる。

「ギルメンの商人に精算させるよ。中に寄っていつて」

「いいんですか?」

「もちろん。ああ、ギルメンじゃないと中に入れないから、一度ギルドに入って貰っていいかな?」

「はい」

ユッカは何の疑いもなくギルドに入った。狩り用の頭装備を外し、いそいそとお気に入りの装備らしい花のかんざしに付け替えている。ルイーゼがカッカツとブーツの底を鳴らして建物の中へ入ると、ユッカはサンダルをパタパタと鳴らして後を歩く。ルイーゼが振り返って言った。

「ジブシーは育成が難しいわよね」

「ですね。ソロもすぐ飽きちゃって……駄目ですね」

「毎日退屈じゃない?」

「ええ、まあ……」

ユッカは言葉を濁した。踊り子の対となる吟遊詩人は便利な支援スキルが多く、引く手もあまただというのに、ジブシーは踊りを求められることもなく、弓を撃つばかり。それと同じ弓手職のスナイパーに比べて異もない。人によつては夜の商売につく仲間もいたが、子供のように平坦なユッカの身体では、怪しい話すら寄つてこないのが現状だ。

曲がりくねった長い通路を三人で歩く。石造りの高い天井を見上げ、ユッカはほうつとため息をついた。

「はあ、凄い建物ですねえ」

「正式にウチのギルドに入ったらここに住めるわよ」

「えっ？」

「丁度、ジブシーさんが欲しかったところなの。良かったら試しにどう？」

「ええっ!? わたし、対人は未経験ですよ」

「奥でスクリームするだけだから大丈夫よ。今ならそのオーラハイブリが付いてくる」

「はっ? そ、そんなっ」

「はは。いつでも支援しますよ」

ハイブリストが苦笑する。

ユツカはどきまぎしながら応えた。

「あ、あの……お試してよければ、入ります」

「本当!? わあ、嬉しい」

ルイーゼはギルド会話とギルドメッセージで言った。

『みんな、ジブシーのユツカさんが新しく入ったよ。仲良くしてあげてね』

長い通路を抜けると、広間に出た。椅子やカーペットの上で、様々な職の屈強な男達が談笑している。

「マスター、おかえりなさい」

「新人さん? よろしく」

「いらっしやい。ゆっくりしてってね」

「むさくてごめんなさいね」

ルイーゼが苦笑しながらメンバー達に言う。

「こちら、ジブシーのユツカさん。とりあえずお試して入って貰ったの。どんどん公平してね」

「ユツカです。攻城戦は経験ないので、役に立たないかもしれませんが、よろしく願います」

べこりと頭を下げるユツカに拍手が起る。そんな態度とは裏腹に、男達は検分するような無遠慮な視線を送る。ユツカは戸惑いつつも愛想笑いを浮かべていた。

クラウンが歩み出て、満面の笑顔で自己紹介をする。

「可愛いコが入って嬉しいな! 合奏ではよろしくネ!」

「は、はい」

ルイーゼが言った。

「今ここで合奏してみたら?」

「えっ?」

「あー、いいネ。深淵とかどう?」

「は、はい。できます」

胸が高鳴った。実は、合奏は初めてだ。バードやクラウンの相方だっていない。

「それじゃ、鞭を持ってきますね」

「鞭ならあるよ」

ホワイトスミスがカートからロープを取り出した。

「不良在庫なんだ。よかったら使ってよ」

「お、お借りします」

クラウンがエレキギターを構えて弾く。地が震えるような低い音色。『深淵の中に』、ロック調の激しい曲だ。

ユッカは腕を高く挙げ、ロープを大きく弧に振った。たゆたう波のように流れるアルペジオ、地を跳ねるように飛ぶ半拍のリズム。流れる旋律に合わせて身体を旋回し、ステップを踏む。手首をスナップさせ、床でパシンと鞭を打って伴奏に合いの手を入れる。大胆に脚を上げるたびに汗が飛び、ギヤラリーが食い入るように見る。

演奏は10分ほどで終わった。

ジャンツ、と弦をかき鳴らしてクラウンが演奏を終える。

「……っはあつ、はあつ……はふう」

荒い息を整えながら、頬を紅潮させてユッカは深くお辞儀をした。パチパチと拍手が湧く。

「いやー、色っぽくてイイネ」

クラウンが額の汗を袖でぬぐう。

「良かったよ。お疲れ様ー」

ホワイトスミスが拍手をしながら近寄る。

「ありがとうございます。これ、お返します」

ユッカはロープを差し出した。ホワイトスミスはそれを受け取って言う。

「いいよ、ギルド入った記念にあげるよ」

ホワイトスミスはユッカの両手に自分の手を重ねて握りしめる。ユッカは思わずビクツとし、身体を引く。

「え、あの、その……きゃっ!」

ホワイトスミスがユッカの両手首にロープを巻き付け、手慣れた手つきで血が止まりそうなくらいにきつく縛り上げた。

「ささ、遠慮せずに貰っておいで」

「な、何の冗談ですか!」

両手を拘束されたユッカが後ずさる。その背中にロードナイトが回り込んで足止めし、覆い被さるように後ろから抱きつく。振り返るユッカの顔に恐怖の色が浮かぶ。

「おや、どこ行くの?」

ユッカは思い切り体当たりをしたが、体格差があるうえに忍耐型のロードナイトはびくともしない。

ユッカは顔を強ばらせて何かを言おうとしたが、恐怖で声は出なかった。

「……いあつ……」

「そう怖がんなよ。殺しはしねえ」

ロードナイトがユッカの脇の下に手を入れ、外側から小さな胸を揉みしだく。踊って上気した肌は感じやすくなっている、すぐに乳首が硬くなった。ロードナイトがきらきらした反射細工を編み込んだ金色の胸当てを鎖骨のほうへとずらすと、薄い胸にピンと立った先端が上を向く。

「はは、ちっちゃくて可愛いおっぱいだねー。子供を犯してみたい」

「や、め……」

ロードナイトが胸を愛撫する傍らで、正面のホワイトスミスが乳首を指で摘み、クニクニとこねくり回す。触れた箇所から疼くような熱が生まれ、ユッカは身体の変化に息を飲んだ。ダンスで汗ばんだ肌にさあつと鳥肌が立つ。

「た、助け……」

マスターを見ると、ルイーゼはソファに腰掛けて、側に立っているアサシンクロスの赤黒い男性器に舌を這わせていた。上半身の甲冑は脱ぎ捨て、陶器の人形のように真っ白な裸体を晒している。アサシンクロスの男根を口の奥までくわえ込むと、豊満な胸がたぶんと揺れた。

「ん？ 何か言った？」

口を離して、ルイーゼが赤い下唇を舐める。言葉を失うユッカに、ルイーゼは艶然と笑った。

「ダンスを見たら興奮して来ちゃったみたい。うちはみんなで仲良くするのがモットーなの、楽しんでいってね」

「なっ……」

「マスター、俺もお願いします」

プロフェッサーが横から男根を差し出すと、ルイーゼは右手にプロフェッサー、左手にアサシンクロスの男性器を持って交互に口に含む。スナイパーがルイーゼのふくよかなバストを抱き寄せて谷間を作るとその間に陰茎を差し入れ、ハイブリーストは床に座ってミニスカートをめくり、黒い下着の上に指を這わせて愛撫を始めた。

ユッカは胸が悪くなった。

クラウンがユッカの前に来て、床に膝立ちすると、局部を覆う金色の衣装越しに円を描くような動きで撫でる。

「へえ、濡れてるね。いやらしい匂いがする」

「い……いやあっ！」

「恥ずかしがらなくていいよ、ボクだって良い演奏ができたときは勃ったりするから」

クラウンがそう言い、ユッカのパンツを引き下げた。細い太股を包む薄絹と赤い玉の装飾が音を立てて床に落ちる。露わになった薄い陰毛を細い指先でかき分け、一本の線を恥丘に引いたような、未成熟な秘裂をなぞる。

「……うく……」

そこは既に湿っていて、細い指先が触れた部分から、じんと痺れるような熱が生まれては、さらに染み出した。

将来、いつか相方になってくれる素敵な男性を夢見ながら、ユッカはこっそり自分を慰めることがあったが、それと同じ感覚だった。嫌がる気持ちとは裏腹に甘い疼きが身体に湧く。舞踏で気が昂ぶっているとはいえ、こんな場面で自分の身体が反応していることにユッカは衝撃を受けていた。

誰にも見せたことのない場所をクラウンが遠慮無くまさぐる。ユッカは羞恥心と薄暗い感じのする疼きに下半身が熱くなり、血が流れ込むのを感じた。性器の一部が腫れるような痛みを送り込んでくる。やがて、クラウンの指がそこに触れ、

電気が走ったようにユツカの身体はビクンと震えた。

「はううっ……！」

「へえ、ココ、充血してる」

明らかに大きさを増した陰核を親指の腹で擦り、中指を花井の中へと沈めていく。突起を擦られる度にユツカは雷に打たれたように身体をひくつかせ、声を荒げ、頬を染めて呻く。そうしているうちに、クラウンの指が奥まで中に入り、お腹の裏側のざらついた部分を搔いた。

「ひあっ」

ぞくりと背筋を未知の快感が這い上がる。その反応に氣を良くして、クラウンの指先が内と外から潰すように、小さな雷とGスポットを責める。

かあつと頭に熱が上り、立っている脚がぐくぐし始めた。割れ目からわずかに水音が立つようになり、クラウンが指を掻き回すと熱い蜜が垂れていくのが分かった。

「……っ……うっ……」

ユツカは朦朧とする頭でマスターを見た。

ルイーゼはソファの上に横たわり、プロフェッサーの根本を親指と人差し指の輪でしごき、ハイブリストに奉仕されながら、頬を凹ませてアサシンクロススのペニスにじゅぶっ、じゅぶっとな手な音を立てて吸い付く。スナイパーはルイーゼの上に乗り、豊満な乳房で勝手にバイズリをしている。

「マスター、出ます」

アサシンクロスがそう言うのと、ルイーゼは喉の奥まで亀頭を飲み込んだ。アサシンクロスはルイーゼの銀糸のような髪を掴んで小さく震え、口内に射精する。ルイーゼが赤い目を細め、喉をぐくりと鳴らして嚥下した。射精の後も食欲に筒の中に残った精液を丁寧^{ていねい}に吸い取り、ようやく唇を離す。そして、今度はプロフェッサーの男根に吸い付いた。スナイパーが正面からアサシンクロススの立ち位置に移り、空いた手に一物を握らせる。

「そろそろ挿れますね」

アサシンクロスが退いたところで、ハイブリストがルイーゼの秘所から指を引き抜くと、脚を開かせて間に割り込んだ。ハイブリストと自身の体重でルイーゼの身体がソファに沈む。奥まで一気に貫かれ、息を詰まらせる。

ハイブリストが動く度にずぶっ、ずぶっと肉の擦れ合う音が響く。それはすぐにずちゅ、ずちゅっといった水音に変わっていった。ルイーゼは突き上げられながら、嬉しそうな表情でプロフェッサーに口で、スナイパーに指での奉仕をしている。

クラウンが言った。

「こつちもそろそろいいかも」

「じゃー、いこうか」

ロードナイトが後ろからユツカの膝の下に腕を入れ、両脚を持ち上げる。ユツカの身体が宙に浮き、ロードナイトに

抱っこされてM字開脚をする格好になった。

「や、やあっ！」

「じゃー、ボクからいただきますネ」

ユツカは足をばたつかせたが、何の抵抗にもならずにあつさりロードナイトに押さえ込まれ、クラウンに突っ込まれた。ユツカのスマイレ色の目から涙がぼろぼろと零れた。

「痛い！ 痛いっ！ 抜いてよおっ！」

濡れてはいても、身体が未発達なせいで入口は狭く、クラウンのペニスがぎちぎちと音を立てんばかりに強張っている。腰を動かすと痛みに顔を強張らせ、クラウンの陰茎に純潔の赤い筋が垂れる。

「あれっ……もしかしてユツカちゃん処女？」

「まじで！ 俺がやればよかった！」

そう言いながら、ホワイトスミスが指先でクリトリスを摘むと、ユツカはビクリとした。

「……うあ……ひう」

ユツカが破瓜の痛みと一緒に流れ込む何かに呻く。

苦しさは消え、別の感覚が頭をもたげ、それを悟られたくなくて口をつぐむ。ロードナイトが嗜虐的な表情で言った。

「もっと泣き叫んでくれてもいいんだぜ？」

ホワイトスミスが愛液を指に塗りたいくと、肉弁に擦りつけて愛撫を始める。クラウンが手のひらで乳房を揉み、指の間に乳首を挟む。三箇所敏感な突起を弄られ、ユツカは頬

を染める。クラウンが動く度に、繋がっている部分がぎゅゅっと締まる。

「あ、良くなってきたかも」

「声でしたら？ 気持ちいいんでしょ？」

ユツカは首を横に振って、涙を流しながら押し黙った。

「ほら、声だせよっ」

ロードナイトがバシンとユツカの頬をはたいた。クラウンとホワイトスミスの動きが止まる。ユツカは堰を切ったように声をあげて泣き出した。

「うわー、最低だネ！」

「レイプしてるお前らが言うなよ」

ホワイトスミスがユツカの頭を撫でて涙を舌で舐め取り、愛撫を再開する。クラウンも動き始めると、泣き続けるユツカの鳴咽に喘ぎが交じり始めた。

「良くなってきた。そろそろ出そつだよ」

クラウンがユツカの両腕を掴んで引き寄せると、スピードを上げた。腕を掴まれているせいでユツカの身体は逃げようにも逃げられず、勢いよく揺さぶられた。身体の奥まで肉棒がめり込み、敏感な箇所を突く。初体験で味わう痛みに混じって、抗いがたい快感がユツカの脳を侵していく。

同時に、クラウンの動きに合わせて、得体の知れない感覚が波のように押し寄せるのを感じていた。射精が近付いたクラウンが声をあげた。

「あっ、出るっ！ 出る！」

「……っあ……な、中は……っふ……やめ……」

クラウンがずるりと引き抜いたかと思うと、ユツカの上から下まで勢いよく白濁が放たれる。視界が真っ白に染まり、ユツカは思わず目をつぶり、熱い精液を顔で受け止めた。

クラウンが満足そうにズボンを履き直してソファに座る。後ろに回っていたロードナイトがユツカの正面に回ると、ユツカの脚をさらに開かせて、遠慮無く肉槍を突き立てた。思い切り奥まで突かれ、ユツカが悲鳴をあげる。

「……ひああっ！」

「つく、きついな……」

クラウンのゆっくりとした動きに比べて、何度も激しく突き上げるロードナイト。まだセックスに慣れていないユツカはお腹の奥を突かれる痛みに顔をしかめる。

「あっ……痛い、痛いですっ……」

「我慢しろよ。俺はこれがいいんだ」

支えられた身体がぐくぐくと上下に揺れる。ユツカは顔を歪めつつも、ロードナイトに怯え、悲鳴をあげずにじっと堪えている。ユツカが恐怖と痛みで身体を硬直させると、穴が締まって痛みが増す。皮肉なことに、それがロードナイトの陰茎を締め付けて射精を早めることになっていた。

「……ぐうっ……うっ……」

「そろ、出すぞ」

勢いよくユツカの中に熱い精が放たれる。ロードナイトが引き抜くと、血が混じってうっすらとピンク色になった精液がどろりと下に零れ、ユツカはそれをぼんやりと見た。

ロードナイトが床にユツカを下ろすと、くたりと力無く前に倒れ込んだ。クラウンが自分の上着を床に敷き、ユツカはその上に転がされる。二人の精液で上着が汚れた。

「次、俺ねー」

ホワイтусミスがユツカの脚の間に身体を挟んで挿入した。精液と愛液が潤滑油になりスムーズに入った。

「顔に精液被っちゃってエロいねえ」

ホワイтусミスが腰を動かし始めた。入口あたりで浅く動く動きだった。ホワイтусミスが腕が伸ばして、指の腹でクリトリスを擦った。挿入されながら擦られると、ほんの少しだけ気持ち良くなって頭が朦朧となる。突かれることに慣れた身体がじわりと熱く疼くようだった。

ホワイтусミスがユツカの両足を自分の肩の上に乗せ、体重を預けてきた。ぐっ、と奥まで突かれ、身体の芯が疼く。自分のその反応に何かを考える暇もなく、ホワイтусミスがそこを突き始めて頭がぼうつとなってきた。

「……ひあっ……あうっ……あんっ……」

「身体が柔らかいね」

ユツカが顔を横に向けると、新しい男が立っていた。マスタの相手をしていたアサシंकロスだ。その向こうでは、

ルイーゼがハイブリストの上に跨って腰を振り、その背中からはプロフェッサーが覆い被さっている。さらに口ではクリエイターの一物をくわえ込んでいた。プロフェッサーがアナルに射精し、クリエイターがルイーゼの紅潮した顔に白濁を撒き散らす。陰茎がルイーゼの鼻先で二度、三度と脈動し、頭のてっぺんから首筋、胸元にわたって大量の精を吐き出す。

「女の子は何回もできるからいいですよね」

アサシンクロスがユッカの乳房に手を伸ばして鷲掴みにした。乱暴な動きに痛みが走るかと思えば、疼痛に似た強い快感が生まれ、身体をビクつかせる。

「アサクロ、さんも……っひう……入れるんですか？」

「ええ。よろしく」

「っあ……分かり、ました……っ」

ユッカは喘ぎながら答えた。

水で湿らせた柔らかな布で身体を拭き、金色の鎧を着込み、ルイーゼははざりと深緑色のマントをひるがえすと、ホワイトスミスと交わっているユッカに近付いた。ユッカの焦点の合わないスミレ色の瞳にルイーゼの白い姿が映る。

男達の邪魔にならない位置から赤い唇でキスをして、舌を差し入れてくすぐると、小さな舌が絡んできた。乾いた口内に粘つく唾液を流し入れると、ユッカが吸い付いてきた。

「んふ……んむっ……ぐちゅ……」

しばらく女同士での接吻を楽しんでいると、ユッカの動きが止まった。

「っ……ひっ……やああん！」

唇を離して悲鳴のような声をあげ、足をつっ張らせたかと思うと、ぐったりとして男の身体に体重を預けた。力尽きたのも一瞬で、子宮を突く止まない責めに再び身体を震わせ、目を見開いて再び喘ぎ始めた。

マスターはにっこりと微笑んで言った。

「これからよろしくね、ユッカ」

「……う……」

ルイーゼが去ろうとする気配を察してユッカが惜しそうにした。クラウンが唇で口を塞ぐと、ユッカは乳房を与えられた赤子のように安心した表情で唇に吸い付いた。

キスを中断してクラウンが言う。

「マスター、この子氣にいつちやった。もうっいいい？」

「いいよ。ただし、君のモノになっても、打ち上げには参加してもらうけど。それでいいなら」

そう言い放ち、居間を後にするルイーゼにクリエイターがついていく。

「混ざらないの？」

「僕はセックスより拷問するほうが好きです。マスターも知ってるでしょう」

「ああ、そうだったね」

「一度でいいから、マスターを解剖させて下さい」

「次の攻城戦で、君がギルドで一番人を殺せたら、解剖しても良いよ」

「本当ですか？ 約束ですよ」

クリエイターが熱気のある声で言い、二人の後ろ姿は通路の奥へと消えていった。



週末の攻城戦。

皆の中には、ユツカのスクリームで満ちていた。

「……あつ、ぐうつ……あうつ……やぁー……っ！」

息も絶え絶えにユツカの叫びが響く。

ユツカは床に膝をついてうつ伏せになり、背後からハイウィザードに犯されていた。華奢な少女が鳴く姿は、小動物が交尾をしているようだった。ゆっくりとペニスを引き抜かれては奥を思い切り突かれ、艶めかしい悲鳴をあげる。全身から汗が流れては落ち、石畳に染みを作った。それはハイウィザードも同じで、汗を浮かべながらストームガストを唱えている。

この時間だけで三人目の男を相手にしていた。火照りきつた身体の中に理性はなく、ユツカは真っ白な頭でずっと叫び

続けている。だらしく開いた口から顎へと涎が垂れた。

ハイウィザードがユツカの中に精を吐き出した。男根が引き抜かれると、精液と愛液の混ざり合った粘液が一緒に出て、お尻から太股へとドロリと伝う。

「はあつ、はあつ、はあつ……」

ユツカが床に倒れ込んで荒い息をついていると、ハイブリストが支援を掛けながら近付いてきた。

「お疲れ様。次は僕の番ですかねえ」

痴態を眺めていたハイブリストは既に勃起しており、ユツカは後ろから抱き起こされると、そのままハイブリストの膝の上に座るような格好で串刺しにされた。

ユツカは自身の体重で子宮口まで深くえぐられ、再び艶めかしい悲鳴をあげた。

「ぐっ……何なの、このスクリーム……ッ」

攻めてきたギルドの女ロードナイトが苦痛に顔を歪めて耳をふさぐ。その上からギルドメンバーのロードナイトの槍が落ちる。他の敵も次々と散らされていく。

ハイウィザードがズボン履きながら言った。

「そろそろ終了時間か」

「N3はスクリームが入口まで届いていいですね」

「しかし、本当にクラウン好みのジブシーが来るとは思わなかったよ。得したな、ロリコン野郎」

「きつと普段の行いが良いせいだね」

「僕、今日は打ち上げはもういい感じです」

「俺らはユッカちゃんとヤッてるからなあ」

「ユッカちゃんお疲れ様！ この後も、他のギルメンがいっぱい良くしてくれるからね！」

攻城戦終了を知らせる鐘が岩中に響き渡った。

夜半、自室で武具の手入れをしていたルイーゼをアサシンクロスが訪れていた。手入れをするといっても、ルイーゼの作業は汚れを拭くくらいで、実際は隣でホワイトスミスが対人用ブレイドを研いでいるのだった。

「マスター、任務が入ったので、次の攻城戦はお休みさせて頂きたく」

「任務？ んー、アサシンギルドの仕事ならしょうがないよね。首になっても困るし」

「それより、ユッカのことでちよつといいですか」

「何か問題でも？」

「はい。アロエとソフォラはともかく、攻城戦と関係のない一般の冒険者を巻き込むのはまずいのでないかと」

「それでお偉方が動くとは思えないけどね。ウチが今までにやってきた枝テロに不正行為に嫌がらせ……何ひとつ、文句言われてないし」

「上が動かないっていう自信の根拠は？」

「攻城戦はね、元々はルーンミッドガッツ王国が金をばらまいて強い兵を育てるために作られたものなんだ。強い奴がちよつと暴れたところで文句は来ないよ」

ルイーゼが盾に付いた血を拭きながら言葉を続ける。

「で、ユッカをどうするって？」

アサシンクロスはルイーゼの兎のように赤い目を見返しながら答えた。

「暴力で言い聞かせれば、自然と居場所はここだけになります。スクリームなら薬漬けにしてもできますし」

ホワイトスミスが笑って言った。

「物騒だねえ。あんまり心配なら、ギルドとパーティを抜けれないようにして、個人通話もできないように細工しておくけど」

「昔からも出れないようにしたほうがいいですね」

「ふむ。じゃあ、そうしてもらおうかな」

「了解」

「アロエとソフォラみたいに仲良くなってくれば一番なんだけどねえ」

「仲良く、ですか。女性は三人から派閥を作る生き物ですからね。私はあまり気が進みませんが」

「ほほう、肝に命じておこう」

そう言って、ルイーゼは特殊鉱石の盾を拭き終わると、ホワイトスミスに渡した。

四、愛する家族にさよならを

「パラ子がこの辺ウロウロしてたぜ。偵察かね?」

チャンピオンが狩りから砦に戻り、服に付いた砂をはたい言った。パラディンが腰を上げて言う。

「私の姉かな。ギルドに入れようと思って呼んだ」

「え!? 姉って……お前の!?」

「ああ。マスターに許可は取ってある」

実の姉がこのギルドに入る意味を考えれば、気心の知れたギルドメンバーほど困惑するのは当然だ。パラディンは年の離れた強く美しい姉を思い浮かべた。艶やかな長髪に鉄の兜を被り、ブロンテラ騎士団の演習で小隊を率いる様は戦女神のようだったこともある。幼い頃から慕っている姉だが、残念ながら本人には嫌われていて仲は悪い。

砦の外に出ると、ジュノーの強風に藍色の長髪とマントをなびかせ、パラディンの短いピンク色のスカートを押さえながら、姉のアルフィーリアが切れ長の瞳で遠くを見ていた。パラディンは手を挙げて視線を誘導する。

「姉さん、こっちだよ」

「ああ、すまない」

「また迷ってるんだろうと思った。来てくれて有難う」

ギルドの加入要請を送ると、速攻で拒否された。

「どうしてギルドに入る必要があるんだ?」

「ギルドメンバーじゃないと建物の中に入れないんだ」

「立ち話でいいだろう」

「込み入った話なんだよ。一緒に住もうって話だけど」

「それは断った筈だ。私は寮に、お前はギルドハウスに住んでる。お互い成人してるのに同居する理由がない」

「死んだ父さんが言ってたろう? 二人で力を合わせて家を継ぐって」

「力を合わせても、家督を継ぐのはお前だ。自覚を持て」

「ほら、もう話が込み入ってきた。とりあえず中で話そう。

俺の住んでる所も見て行つてよ」

「……お前のギルド、噂になってるぞ。迷惑行為をしてるんだろう? どうしてお前が、そんなギルドに」

「迷惑行為は一部のギルメンだけ。そのへんも中で話すよ」

アルフィーリアは渋々とギルド加入を受け入れた。姉と弟は建物に入り、迷路のような砦の通路を一緒に歩く。

広間に出ると、ギルドメンバーの視線が一斉に向く。アルフィーリアがえらヘルムとアイアンケインとヘルムを外して顔を見せると、凜とした美貌に周りから感嘆の声が漏れる。『弟がお世話になっております。姉のアルフィーリアと申します。所用でお邪魔しますが、すぐ抜けますので』

ギルド会話で挨拶をすると、会話が怒濤のように流れた。

『姉!? ギルド入るの!?』

『え? っつかもうギルド入ってるし! なんで!?』

『なんで、ってそういうことだろ。よっしゃ!』

「へっ!? お姉さん!?」

すぐそばにいたチェイサーも目を丸くしている。

不審そうな顔をしながらも、アルフィリアは弟の後を追う。二人で廊下を歩き、弟が一室のドアを開けた。

「ここが俺の部屋」

「……邪魔するぞ」

アルフィリアが入ると、弟が背中を突き飛ばした。床に転がってたたかに肩を打ち、床に手をつけて顔を起こすと、4人のギルドメンバーが見下ろしていた。振り返ると、パラディンがドアを閉め、カギをガチャリとかけた。

「はい、一名様ご案内ー!」

「おねーさん、ギルドにようこそ☆」

陽気な声でギルドメンバー達が言う。その目には剣呑な光が宿り、口調とは合わない。ただならぬ雰囲気を感じてクロスシールドを構え、アルフィリアは後ずさる。そこをパラディンが羽交い締めにした。

「……!?」

アサシンクロスとホワイトスミスがアルフィリアを仰向けに押し倒し、手錠を嵌めた。床に落ちたクロスシールドと剣をプロフェッサーが足で蹴って部屋の隅に転がす。

「触るな! 離せ!」

暴れるも、四肢を封じられた上に三人の男に身体をがっち

り押さえられて動けない。

「どういうつもりだ? お前達、一人の女に男三人がかりで恥ずかしいのか!?」

「お姉さん強いんでしょ?」

「すごいねーこの盾。俺には持てないわ」

アルフィリアはパラディンを見て叫んだ。

「お前、周りに脅されて、こんなことをしたのか!?」

「違うよ。俺がみんなに頼んだんだ」

「なっ……!?」

クリエイターがアルフィリアの首にメスをあてがう。冷たい刃物の感触に、アルフィリアの顔がすうっと青ざめた。

「動いたら死にますよ。静かにして下さい」

アルフィリアは半ばパニックになって弟を見たが、弟は女バラディンのミニスカートをまくり上げ、白い下着を剥ぎ取り、下半身を露わにさせているところだった。

「お前、何をする気だ!? 私はお前の姉なんだぞ!」

「姉さん、俺は、……一度も貴女を姉として見たことなんて無かったよ」

「責様……! 父上はお前をそんな風に育てたか!」

「父上父上ってうるさいな。姉さんはいつまで家に縛られてるんだよ。家を継いだのは俺なのに」

「お前は! 父上に何を学んだ! 人を護るために剣を振らず、人を傷つけるためにこんなところで剣を振って! その

上に姉を陥れるのか！」

父上と弟。アルフィーリアが確執を持つ二人の思い出は、生まれたときまで遡る。

アルフィーリアは聖騎士の名家に生まれた。家業を継ぐことを定められ、物心がついた頃には剣を握らされ、父に厳しく躰けられた。同じ年頃の少女のような恋もお洒落もない人生だったが、誇りと剣の道と父の愛があった。

もう子は産めないと言われていた母が弟を産むと、父は変わった。弟を育てることに夢中になり、アルフィーリアは置いていかれた。小さな弟はあつという間に姉の背を抜き、剣技も力も上を行った。

父を奪い、剣を持つ意味を奪った弟は、いま姉の中の女すらも奪おうとしていた。

クリエーターが空いているほうの手で器用にポーチから酸瓶を出すと、静かにアルフィーリアの胸当ての上に注ぐ。ジュツと金属が溶け、嫌な匂いの煙が立った。たちまち鎧が溶けてひび割れ、たぶんと豊満なバストが零れ出た。アルフィーリアが手錠の嵌められた腕で慌てて隠したが、ホワイトスミスの手が乱暴に取り払った。

「へーえ、こいつあすげーや」

「お姉さんの鎧って普通とサイズ違いますよね」

「何、特注なの？ 胸がデカくて？」

四方から手が伸び、さわさわと頬や首筋や腹を撫で、柔肌

を揉みしだき始める。こそばゆい感触に震えていると、ピンク色の乳首を摘まれ、今度は痛みに顔をしかめる。

「おっぱい柔らかけー。マシユマロみたい」

ホワイトスミスが乳房を押し上げて谷間を作り、ペニスを挟んだ。アルフィーリアは初めて見る大人の男性器に息を飲んだが、直後には気持ち悪そうに顔を逸らした。

ガチャリ、と音を立ててパラディンが自分の小手を外して床の上に転がすと、裸の指をの臍の中へと潜らせる。

アルフィーリアは未知の場所に異物が挿入される違和感とおぞましさに震えた。狭い入口を押し広げるようにぐねぐねと指が動き、チクリとした痛みが走る。

「姉さん、痛くなるから力抜いて」

「指一本がやつとじゃん。もしかして処女？」

「初体験は弟！ マジすげー！」

パラディンが秘所に顔を近付けてクリトリリスに舌を這わせた。男性経験どころか自分を感めることすら知る機会の無かった身体には、そこは排泄の器官でしかない。アルフィーリアは生温かい粘膜のぬめる感触に驚愕して青ざめたが、身体は抑えられて動かない。

「……や、止めろっ！ そんな所っ……」

「まあまあ。すぐに好きになりますよ」

弟が舌で陰核の皮を剥き、口に含んで転がした。アルフィーリアは全身に電気が走ったような衝撃を覚えて背筋を

仰け反らせ、思わず足の指をぎゅっと閉じる。

足が震え、身体の熱がじわりと染みだしていくような感覚があった。舌で舐め上げられる度に、全身に力が入っては弛緩する。全身は恐怖で凍える思いだったが、触れあう一点から熱が溢れ、下半身に血液が溜まっていくような感覚を味わった。心は嫌悪感で溢れているのに、敏感なところを舐められると、切なさに似た疼きでアルフィリアの身体は火照り、頬は赤く染まっていく。

口での愛撫は長らく続き、アルフィリアは自身の変化に怯えていたが、少しもオーガズムに達しそうにない様子に弟は断念して、股間から顔を離れた。

と、アルフィリアが力を抜いた途端に、弟が膣の奥まで指を突き入れた。恐怖と痛みでアルフィリアはまた身体を固くし、膣口が男の指を締め付ける。弟はしばらく指を動かして姉の表情を眺めていたが、少しだけ蜜洞が和らいだのを見て指を抜く。

アルフィリアの目の前でズボンが下ろされると、赤黒い男性器が弾けるようにせり出した。想い人の痴態を前にして、通常の男性よりも大きいそれが、処女相手には悲惨なほどいつもよりも固く屹立している。

「な……お前、それは……」

アルフィリアは次の行動を予想して、首を必死に横に振ろうとしたが、首筋にあたるクリエーターのメスの感触にそ

れは叶わない。願っても空しく、弟の肉棒はアルフィリアの中を侵していく。ずぶぶつ、と摩擦音を立てて、強引に。

「……っ！」

身体が引きちぎられるような痛みに顔を歪め、アルフィリアは身体を突っ張らせた。お腹が裂けるような圧迫感に下を見ると、大きく膨張したパラディンの肉槍が、指一本入るのさえやっとだった蜜口に突き刺さっている。それも半分くらいしか入っていない。

目尻から透明な雫が盛り上がり、頬を伝っていく。特別な初夜を望んだ訳ではない。女の子らしい夢を描いていた訳でもない。それでも、人並みの幸せくらいは欲しかったと思う。「お姉さん、弟さんの味はどうですか？」

「一生の思い出だね」

パラディンが腰を動かし始めた。引き抜かれて楽になったかと思うと、痛みと熱を交えながらずぶりと突き立てられる。結合部からは血が滲み、弟の陰茎に赤い筋になって絡み付いている。深く呼吸し、額に脂汗を浮かべながらアルフィリアは痛みに耐えた。

「はあ……、姉さん、奥まで入ったよ」

弟が前後に動き始め、陰核を指の腹で擦る。

硬い芯のある突起を優しく擦られると、挿入の激痛の中で疼きに似た何かが身体の奥で膨れあがり、奇妙な感覚がゾクゾクと背筋を這い上がる。これが快感なのだと自覚してアル

フィーリアは愕然とした。

職業柄、痛みに強い身体は行為に慣れるのも早かった。

痛いと言っても、耐久力のない魔術師達やパーティーメンバー全員のダメージを肩代わりするよりは軽い。骨が折れたり、内臓が飛び散るわけでもなく、粘膜が少し裂けるだけだ。

ただ、あまりにも心へのダメージが強く、アルフィーリアはそのことに気付かなかったのだ。痛みに強いという誇るべきことが、初めて忌々しく思えた。

知らない男達の前で、実の弟に辱められる初体験がどれだけ悲惨なのか。それも、いっそ痛くてどうしようもないくらいだったらまだ良かったのに。アルフィーリアが屈辱で潤む目で弟を見上げると、反応を探るような目で見返されて思わず目を逸らした。

と、次第に痛みは消え、熱い疼きが湧く。身体の奥を突かれると、痒いところを搔かれたように気持ちがいい。ただ、本能的に感じてはいけない気がしてそれを押さえ込んだ。

「……んうっ」

甘い声があがり、今まで以上に男達の視線が表情に集まる。

「処女なのにこの反応ですか」

「ウチにピツタリだな」

下腹部が熱い。陰核を擦られ、お腹の裏側を突かれる度に気持ちよくて声が出てしまう。弟もそこを執拗に突いてくる。快感で頭がぼうつとなり、人前でみつともなく喘ぐことも、

相手が弟であることも、何でも良くなってきた。

首筋に当てられた冷たいメスはいつの間にか外されていたが、アルフィーリアにもう逆らう気力は無かった。

「あー、俺出そうだな」

ホワイトスミスが先走りでぬめる陰茎を胸の谷間で扱きながら言った。最初よりも随分と固さを増したそれは、すぐに欲望をぶちまけた。視界が真っ白になり、生温かい白濁がアルフィーリアの前髪から顎の下までを汚す。ホワイトスミスが一物を拭くと、管に残った汁が再び顔に降り注いだ。

吐き気がするような、青臭い匂いだった。しかし、弟のピストン運動が元の悦楽の沼にアルフィーリアの意識を沈める。「……姉さん、俺もイクよ」

弟がアルフィーリアの身体を引き寄せた。膣の中で陰茎が痙攣したかと思うと、奥深くに熱い奔流が注がれる。ホワイトスミスよりも長く、大量の精が吐き出される。

弟が自身を引き抜くと、血の混じった粘液の糸が二人の間を引いて垂れ、アルフィーリアは身体に穴が空いたような感覚に陥った。

弟が離れると、次にプロフェッサーが上に乗って男根を挿入した。精液が潤滑油になり、痛みもなくずりりと入る。突かれ始めるとすぐに例の疼きが生まれた。火照るように感じるところを擦りながら、プロフェッサーが乳房に手を伸ばす。双丘の頂を摘まれると思わず声が出た。それを眺めていたア

サシンクロスがクリトリスに手を伸ばして摘む。

複数の腕で色んな所を弄られ、水音を立てながら、アルフィーリアは渴いた口を開いて喘ぐ。身体は熱いのにかくガクと小刻みに震えっぱなしで、頭が真っ白になっていく。体中から汗が流れ、結合部からも洪水のように愛液が溢れ出る。部屋に喘ぎ声と水音と肌の触れ合う音、それに男と自分の体液の匂いが満ちる。やがてプロフェッサーが射精し、お腹の上に精を撒き散らした。

休む間もなくアサシンクロスのペニスが突き立てられ、先端でお腹の裏を擦るように動かされる。与えられるままに快感を貪っていると、焦らすような動きに変わった。わざと違うところを突き、寸前で動きを止められたり、そうかと思えばいきなり奥まで深く貫き、火のついた体をいのように翻弄する。身体に熱が溜まって苦しい。切なく疼いてたまらない。アルフィーリアが涙を流しながら許しを請うと、ようやく良いところを責めてくれるようになった。

ラストパートで洩れた声で喘ぎをあげ続け、アサシンクロスが中に出すと、次はクリエイターが乱暴に挿入した。

クリエイターは自分が満足するための動きで、慣れない奥をひたすら突いた。痛みがあつたが、単調な動きに、アルフィーリアはようやく狂った快感から身体を休ませることができた。だが、それもすぐに慣れ、子宮口でも全身を震わせて感じるようになってしまった。クリエイターが軽蔑の

眼差しでアルフィーリアを見たが、その視線すらも被虐的な快感に変わってしまう。

全員が射精した後、次々に屹立した肉槍を追加されて奥を突かれ、他のメンバーには体中をまさぐられながら、アルフィーリアは発情した牝犬のように喘ぎ続けた。

二周目が終わったところでようやく落ち着き、満足したギルドメンバーがそれぞれ座ったり眺めたりして休憩を取り始めたところで、弟が顔の側に立った。

「姉さん、舐めて貰っていいかな」

弟が精液と愛液でぬらぬらと光る肉棒を口腔にねじ込む。生臭い体液の匂いと、わずかな鉄の味が口内に広がり、アルフィーリアは思わずペニスを吐き出したが、顔を掴まれて再び突っ込まれると、拙い舌使いで大人しく舐め始めた。

ひととおり舐め終わって味がなくなってくる頃には、パラディンの男根は再び膨れて固さを取り戻していた。

ちょうどアルフィーリアの上に乗って交わっていたホワイトスミスが、身体を震わせて気を達していた。男がペニスを引き抜くと、アルフィーリアの体内に冷たい外気が流れ込む。

「じゃー、俺らはそろそろ退散するわ」

「ああ。ありがとう」

「いやー、忍耐型は凄いねえ。アンタとお似合いだよ」

「お二人さん、お幸せに！」

ドアを開けて男達が出て行く。

ようやく解放されたアルフィーリアは身体を冷ましながら、虚ろな目で弟を見た。狂宴が終わって熱が冷めれば、近親者と交わった罪悪感と、快楽を得た自分への激しい嫌悪感が重圧になってのしかかってきた。赤く腫れた目から一筋の水が零れる。弟は指で涙をすくうと舐め取った。

弟がアルフィーリアの白濁に塗れた身体をシートで拭き、五人分の精液にまみれた秘所を白ポーションで綺麗に濯ぐ。そして、うつ伏せにさせると、腰を引いて尻を突き出す格好をさせ、背後から屹立したペニスを再び挿入した。熱く太い槍に貫かれ、アルフィーリアは声をあげる。

「……う……」

痛みはなく、そこにあるのはドロドロした肉欲と少し甘い味のする背徳感。アルフィーリアは首を横に振った。

「もう、やめてくれ。頼む……」

パラディンは無言だった。

その代りに、熱く大きい手で乳房をこね回し、陰核を摘み、耳朶を噛んで舌を這わせる。体の奥底から熱を掘り起こされ、アルフィーリアはシートに顔を埋めてむせび泣いた。それも次第に、嗚咽から甘い喘ぎ声に変わっていく。

そんな身体を愛おしそうに抱き、パラディンは姉を優しく犯した。子宮に熱い子種を注ぎ、長い射精の後、弟は身体を繋げたまま頭を撫でて言った。

「姉さん、愛してるよ」

アルフィーリアは静かに涙を流した。

パラディンが廊下に出ると、待ちかまえたようにチェイサーが壁から身体を起こして言った。

「姉とやるなんて、あんたがこんな変態だったとはねえ」

「貴方と違って、誰でも愛せるほど器用じゃないんでね」

「おー、こわっ」

チェイサーは嘲笑を浮かべて去る。パラディンは部屋に鍵をかけたのを確認し、マスターに報告に上がった。

「愛の女神フレイヤは、兄フレイの愛人でもあったんだよね。異教の神なのがちょっと残念だけど。ま、上手くいって良かった」

ルイーゼはモロク果実酒の注がれたワイングラスを片手で弄^{もてあそ}びながら、満足そうに言った。

「有難う御座います」

「ただ、恋人同士でも打ち上げには出てもらうよ。これから辛いかもしれないけど」

「覚悟の上です」

パラディンは頭を垂れた。このギルドでなければ、思いを遂げることすら叶わなかった身だ。

チャンピオン

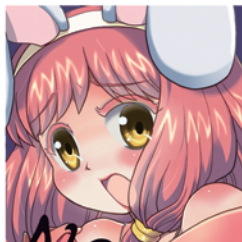
双子の妹と
仲が良く、
過保護。
真面目



Sophora

ハイブリースト

双子の姉に
憧れてアコ
ライトに。
天真爛漫



Aloe

ジブシー

泣き虫で
気が弱い
ロリッ娘。
素直



Yucca

チェイサー

おっとり人妻
ほがらか。
旦那は美形



Rose

パラディン

由緒正しい
聖騎士家系
の出身。
ギルマンの姉



Alfelia

プロフェッサー

同性愛者
& 男嫌い。
キツイ性格
の眼鏡ッ娘



Syusu

クリエイター

人形のような
美少女。
製菓型で
したたか



Mary

パラディン
ギルドマスター

オーディン
の狂信者。
ビッチ



Luise